

訳者より読者の皆さんへ

『回想記』全二六四話のうちの「革命先烈に捧げる誓い」という一話（残念ながらこの本には収められませんでした）の中に、訳者の胸中にもっとも強烈に刻み込まれた次のような一節があります。「人の生には限りがある。しかし歳月の流れに関わりなく永遠に人々の心の中に生き、聡明な感情と思想を呼び起こすそのような生がある」。訳者は釜ヶ崎のドヤの一室で、時に翻訳ノートに涙をぼたぼた落としながら、「この人たちは永遠に生きるべきだ」「この人たちは永遠に生かすために、なんとしてもこの翻訳を完成させよう」と、三〇年の歳月を傾けたのでした。極寒と極度の飢えと、狼の群れのごとく襲いかかる敵との激闘に勝ち抜き、「朝鮮革命万歳」「女性解放万歳」を叫んで壮烈な最期を遂げた彼ら、彼女らの生が、永遠に人々の生の糧になるものと信じます。

二〇二三年三月

鈴木 武